

中国日本商会

みつま

三潞先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



三潞コラム 中国「津津有味」-4

中国ビジネスに携わる人から良く出される質問が、中国人の愛国感情と反日感情です。私は“受けを狙って？”時々こういう言葉を中国人に投げかけます。「中国人に愛国心はない！」。勿論、それだけなら中国人は怒るでしょう。私はこう続けます。

「中国人に愛国心はないが、でもある。中国人に愛国心はあるが、でもない」。からかっているのではありません。つまり、中国人が言っている愛国心の中身を問うているのです。

ビジネスに携わっている皆さんにこういった話はあまり関係ないのでは、と思う方も多いでしょう。でも中国人を理解するにはここが分かっていると、容易に誤解を招いてしまうのです。それはビジネスにも色濃く投影されます。そこで、数回に分けて、中国人理解の土台としてこの問題を扱ってみます。

中国人の言う愛国心を分析すると、3つの要素から成り立っています。第一が「愛中華文明」、第二が「愛漢民族」、第三が「愛中華人民共和国」。実は、中国人は愛国を唱える時、意識的か無意識的か、実に都合よくこの3つを使い分けます。

まず「愛中華文明」について。“中国”“中華”“中夏”“華夏”と言った一連の語彙は、元々黄河の南北地帯、古の中原の地を称し、東夷・西戎・南蛮・北狄との対象で述べられている言葉ですが、そのアイデンティティを形成するのが中華文明。ところが中華文明は融合文化で、これがいつ頃成立したかについてはまさに研究中。最近の論証では、既に5千年前、各地に栄えた文化に緊密な交流と文化の融合が見て取れる、と言われます。遼寧省西部の紅山文化の牛河梁遺跡群、黄河下流域の山東省泰安市大汶口遺跡、長江流域の安徽省含山県凌家灘遺跡、中原地域の河南省靈宝市鎊鼎原の集落遺跡などの上流階級の副葬品などを比較すると、明らかな文化の共有が見出されるとのこと。

中国神話学は袁珂などを中心に20世紀に大発展しますが、1970年代以降の考古学的発掘の成果も踏まえ、神話に登場する、人文の祖と称される黄帝・炎帝（新農氏）・伏羲などはいずれも古代の各部族の首長が神格化されたもの、と考えられています。同時に中国古代社会にトーテミズムが盛んであったことも実証されています。

20世紀初頭、北京で劉鉄雲によって甲骨文片が発見され、解読によって殷王朝の存在が確実になり、20世紀後半には河南省二里頭の発掘で夏王朝と思しき文化層が比定され、中国王朝史は“24史”がさらに拡大したわけですが、その連続性、即ち共通するアイデンティティの裏付けは革命思想にあります。“革命”とは「天命が革まる」こと、即ち、全王朝の施政があまりに乱れ、天帝に見限られ、新たな統治者が指名される、これによって一貫性が保たれるわけで、そのため、各王朝は前王朝の末期の政治の乱れをことさらに誇張して書くわけです。

中国日本商会

みつま

三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



この天命思想は五行思想による裏付けと共に現代まで連綿と受け継がれており、中華人民共和国が正史として清史を編纂する、と言うのもこの思想に基づいているし、こういった考え方は、毛沢東-鄧小平-江沢民-胡錦濤-習近平という指導者の正当性を裏付ける時にも援用されています。この続きはまた次回に。